The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本人の死生観・遺体観に基づくグリーフケアとしてのエンゼルメイクに関する考察
Author(s)	小林, 珠実
Citation	医療・生命と倫理・社会. 2012, 11, p. 94-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7522
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本人の死生観・遺体観に基づく
グリーフケアとしてのエンゼルメイクに関する考察

小林珠実
（大阪大学大学院医学系研究科看護実践開発科学講座助教、成人看護学）

本稿は、日本古来の死生観や遺体観と関係の深いエンゼルメイクに着目し、これをグリーフケアの一環と捉えた上で、関連する問題を考察した。エンゼルメイクとは死に顔に施す化粧であり、医療行為による侵襲や病状などによって失われた生前の面影を、可能な範囲で取り戻すための顔の造作を整える作業のことである。グリーフケアとは、死別体験者（おもに遺族）への援助を表す言葉として広く用いられており、悲嘆のプロセスにおいて、喪失により生じる問題を軽減するための医療者からの働きかけを意味している。エンゼルメイクは、その人らしい顔を残すことを重んじる日本人の死生観や遺体観と関係が深く、遺体の清拭や整容、保清などのケアを通して、患者の尊厳を保ち、遺族の悲嘆や喪失の過程をサポートするグリーフケアの一つと捉えることができる。

1 では死別とグリーフケアについて、2 では日本人の死生観・遺体観について、3 では日本における死をめぐる生活習慣について、それぞれおもな論点をまとめた上で、4 ではグリーフケアとしてのエンゼルメイクについて考察を加える。

1　死別とグリーフケア

(1) 死別時のエンゼルメイクの意義

近年、日本における自宅での死亡は年々減少の傾向にあり、約 8 割の患者が病院などの医療施設で最期を迎えている。かつて死亡場所として自宅が多かった頃、遺体の処置は家族の手によって行われ、死という出来事は自然な形で家族とともに存在していた。

患者が病院や施設で死を迎えると、看護師が最期のケア（逝去時のケア）として亡くなった患者のからだを清潔にし、死によって生じる外観の変化をできるだけ目立たせないようその人らしく整えるといった死後のケア（死後処置）が行われる。この死後のケアは、看護師による「看護ケア」の範疇に含まれるものとして認識されている。特に、死に顔に化粧を施すエンゼルメイクは、遺族とのお別れをスムーズに行うために、喪の作業の最初に行われる儀礼として捉えることができる。エンゼルメイクは、病状の進行や悪化に伴う衰弱あるいは治療に伴う闘病生活により変化した患者の外見を、遺族が見慣れた姿あるいは穏やかな姿に整えることを目的としている[1,2]。また、エンゼルメイクは最期の顔を大切なものと考えた上で、その人らしい容貌・装いに整えるケア全般である[3]。さらに、エンゼルメイクを含む死後のケアに家族が参加することで、死を受容するきっかけとなったり、「別れができた」といった言葉が聞かれるなど、グリーフケアとしての最初のステップに

なったことが報告されている[4]。

死別に伴う遺族の悲嘆は、誰にでも生じる正常な反応であり、たいていは時間の経過とともにやがて和らいでいくものであるが、複雑かつ強い悲嘆反応が長期間に及んだ場合、悲嘆からの立ち直りをサポートしていくための医療者によるグリーフケアの意義は大きい。本来、グリーフケアとは死別や悲嘆へのケアのみを意味するわけではなく[5]、患者の生前から患者家族の苦痛や不安の軽減を図り、傾聴や思いに寄り添うケアなど様々なかたちで提供されるものである。エンゼルメイクは、2000 年前後より看護師の業務の一環としてのケアから遺族中心のケアへといった視点の転換に伴い、家族も共に参加するようになってきている[6,7]。それが死別に伴う遺族の悲嘆を和らげるグリーフケアの一つと位置づけられるようになった。

(2) 死別・喪・悲嘆

本稿で用いる死別、喪、悲嘆という用語は密接に関連し合っており、医療者の視点で捉えた基本的な定義を表にまとめた（表 1)。

表 1 死別・喪・悲嘆

死別	喪	悲嘆
愛する人の死によってもたらされる喪失、あるいは喪失感を伴う死に別れ	死別に伴う文化的、社会的儀式を含めた適応のプロセス（葬式等）	喪失に付随する感情的反応、具体的には悲しみや嘆き
⟷ 密接に関連している ⟷		

(3) 死別とグリーフケア

「死別」という体験は、人それぞれに異なる極めて個人的な体験である。死別の対象が配偶者であるか子どもであるのかによっても、悲嘆反応の表し方や悲嘆への向き合い方も異なる。悲嘆のプロセスに必要な時間も個々により大きく異なるものである。

死別体験者への援助を表す言葉として、日本では「グリーフケア」、「遺族ケア」、「死別ケア」といった用語がほぼ同義で用いられている[8]。死別後のグリーフケアは、「重要な他者を喪失した人、あるいはこれから喪失する人に対し、喪失から回復するための喪の過程を促進し、喪失により生じるさまざまな問題を軽減するために行われる援助」[9]、「遺族への直接的、意図的な支援だけではなく、患者の死の前後を問わず、結果として遺族の適応過程にとってなんらかの助けになる行いのこと」[5]などと定義されている。

グリーフケアは、「回復」と「適応」の二つの観点から捉えることができる[8]。回復の観点は「死別を経験することで生じる身体的、心理社会的機能の低下に対し、様々な援助や介入によりもとの正常な身体や心の働きを取り戻すこと」であり、適応の観点は、「死別後の適応として、遺族が故人の死を受けいれるとともに、生活上の変化や人生設計の変更などの事態に適合し、故人のいない環境と調和できた状態」のことである。

グリーフケアは、提供される形態から、家族や友人・知人、医療関係者による慰め、傾

聴のような誰でも行える援助、支持的精神療法やサポートグループなどのように一定の形式や手続きによる援助、複雑性悲嘆に対する精神科医やカウンセラーなどによる専門的な治療の三つに分類することができる（表 2)。

表 2 グリーフケアの分類（引用文献 8 より引用改変）

誰でも行えるケア	一定の形式や手続きによる援助	治療的介入（医療行為）
・家族や友人、知人、医療関係者による慰め ・傾聴 ・何も言わずただそばにいる ・気持ちに寄り添う	・支持的精神療法 ・サポートグループ ・行政サービスなど社会資源に関する情報提供	・精神科医やカウンセラーによる専門的治療 ・グリーフセラピー

グリーフケアは、遺族の声にじっくりと耳を傾け、気持ちに寄り添うといったいわゆる心のケアだけでなく、専門家の介入による治療や社会資源に関する情報提供など、遺族の生活に関わるサポートとして捉えることも重要である。

2　日本人の死生観・遺体観

(1) 日本人の死生観

古来の日本人の死生観によれば、この世と死後の世界は往来可能で、死を不浄・穢れとして忌み恐れ、死の汚れは禊ぎによって洗い清められると考えられていた[10]。

しかし、現在の日本人が持つ死のイメージは、死はできる限り遠くに押しやり、日常生活のなかでは意識しないようにするなど、死を恐れ、忌み嫌うものであると考えられる。日本人が抱く死生観を表 3 にまとめた[11]。

表 3 日本人の死生観（引用文献 11 より引用改変）

◆死を人間の力の及ばないものとして、常に覚悟を決めておく いざという時は、それを「宿命」とみなす	
ある程度の年齢になれば、いつ死んでもいい、といった身の回りを整理する	死が確実なものと分かっていて、じたばたするのは見苦しい
◆死について語ることをタブー視しているわけではない	
老人が集まると、故人となった仲間の話や、次は誰の番といった話を淡々とする	「死ぬのはちっとも怖くない。死ねば爺ちゃんが待っていてくれる！」といった発言
◆一方で、死にゆく者と生き残る者が、死について語るという習慣はあまりない	
老人や死を覚悟した人が遺言などと言い出すと、家族は「まだまだ死なないよ！」「何を弱気な事を言っているの」「縁起でもない！」と、死について否定し語ることをタブー視する	「死ぬのは嫌ではないけれど、痛いのは嫌だ」苦痛そのものより我慢できない自分の姿を嫌う人さまに迷惑をかけたくないとの信念を持つ

私たちがイメージする「よりよい死」とは、心やすらかに後事を託し、未来への希望をもって死に赴くことであり、恐ろしい孤独な死や愛する人との永遠の別離となる死でも不浄で忌むべきものとされることのない死である[10]。この「よりよい死」を迎えることができるよう精神的あるいはスピリチュアルな側面からの援助が担うことが大切である。

(2) 日本人の遺体観

遺体へのこだわりは、文化によって異なり、遺体の処理方法などはそれぞれの文化で定められている。このことは、遺体の処理の内容が、その文化における死に対する概念や慣習と深く関係していることを示唆している。日本人が抱く遺体観を表 4 にまとめた[11]。

表 4 日本人の遺体観（引用文献 11 より引用改変）

特徴	具体例・解釈
遺体を丁重に扱う	・遺族が遺体に手を合わせて拝む ・「よく頑張ったね」と遺体に声を掛ける
儀礼の為にも遺体や遺骨は不可欠	・戦後長期間、外地で戦死した人々の遺骨を収集している ・御巣鷹山での航空機墜落事故（1985 年 8 月）で遺族による遺骨の収集が行われた
遺体の状態と死後の世界との関係	・「安らかな死に顔」によって、遺族の心が慰められる ・あの世へ行っても別の形で生き続ける

遺体の状態が、死後の世界での死者の霊の安寧と深くかかわっているとする信仰が残っており[11]、安らかな死に顔によって遺族の心が慰められる。他方、遺体がどんなに無残な状態になっていたとしても、あるいは人間の形をとどめていない身体の一部であったとしても、そのことが死んだと思われる自分の家族のものであることを確認することへのこだわりは強く、遺体や遺骨の処理が行われる。このことは死が確実なことであることを認めたくない家族に対し、極めて無残な状態であったとしても、多くの遺族が遺体やその一部を確認し、家に持ち帰ることに慰めを感じていることを示しており、日本人が遺体や遺骨にこだわるのはそれらに対する儀礼を行うためであると考えられる[11]。また、遺体のない儀礼は、遺族にとってはおおきな苦悩であり、日本人は遺体を丁重に扱い、その人らしい顔を残すことへのこだわりがあることも指摘されている[11]。

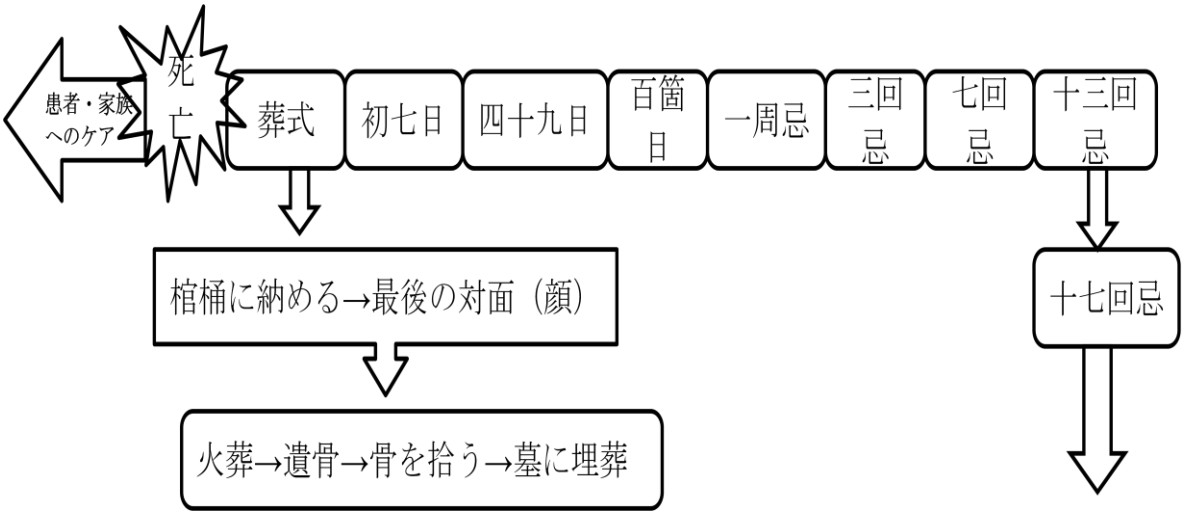
3　日本における死をめぐる生活習慣

(1) 死をめぐる生活習慣としてのエンゼルメイク

日本では、「喪」は社会的な儀礼を示す言葉として用いられ、身近な家族の誰かが亡くなると、その遺族や親族は一定期間、日常の慣習と異なる「喪に服する」期間を過ごす。一般的に仏教では、臨終を迎え、葬儀を終えると初七日、四十九日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌と続き、その後も十七回忌、三十三回忌と忌日を設け、僧侶を招いての読経・供養といった法要が執り行われる[12]（図 1）。この死をめぐる生活習慣には、地域差や故人

の弔い方により差はあるが、数日から数カ月、数年もの期間にわたって死者の供養を継続的に行っていくことが特徴である。この「喪」の作業の期間は、遺族にとって死別後の悲嘆や喪失のプロセスに適応していくために必要な慣習と捉えることができる。

図 1 日本における死をめぐる生活習慣（法要行事）



前述のとおり、現在、多くの人が病院や施設で死亡し、臨終を迎えた患者は看護師によって死後のケアが行われ、死化粧としてのエンゼルメイクが行われる。これは、喪の作業における最初の儀礼であり、遺族に対するグリーフケアの一つとして位置づけることができる。最期の顔は大切なものであるといった観点で行われたエンゼルメイクにより、故人はその人らしい容貌・装いに整えられ、その後、葬儀・告別式が行われる。そして、遺族や親族､参列者らは棺の蓋に開けられた小さな窓から故人の顔を覗き込んで別れを惜しみ、故人の顔の周りや全身に花を飾り最後の別れの時間を過ごす。喪の作業へとつながる故人の最期の顔のありようは遺族にとって非常に重要であり、故人の最期の顔を見ることには大きな意義がある。

4　グリーフケアとしてのエンゼルメイク

(1) 顔の役割とエンゼルメイクとの関係

本来、私たち人間は「顔」を持ち、それは多くの人々を識別する際に重要であり、生きていく上で重要な役割を担う。その「顔」を認識することで、その人が誰であるか分かるように､「顔」は社会との関係が深く、人の記憶として所有される。そうした社会性と関わる「顔」にメイクを施すことは自己表現につながり、その人の内面性や心の動きをも映す鏡として影響を持つことになる（表 5)。死後、エンゼルメイクを行い、故人の生前を想わせる顔に整えていくことに加え、その人の生前の穏やかな表情に近づけることで、故人の尊厳が守られ、遺族はその人の最期の「顔」を見送ることができ、安らぎや安心感を得ることにもつながっていく。

表 5 顔の役割とエンゼルメイクの関係（筆者作成）

社会性としての顔	「その人らしい」顔にすることによって、遺族や友人が「その人」を認識できる。対外的な意味としての顔。
内面の心の動きを表す顔	「穏やかな表情」にすることは、遺族の心理面に何らかの影響を与える可能性がある。その人自身の内面としての印象。
自己表現としての顔	最期の最期まで「その人らしい」顔にすることで、「その人」の尊厳を守ることにつながる。

顔かたちにその人らしさが一番表れるところから、その人らしさを確認するためにエンゼルメイクが行われるという指摘もあるが[13]、その人が持つ表の顔だけではなく、内面の心の動きが加えられることでさらにその人らしい「顔」が形作られていく。

(2) グリーフケアとしてのエンゼルメイク

現在、一般的な葬儀として行われる通夜・告別式において、遺族や葬儀参列者は、棺の中に納められた遺体の「顔」と対面することになる。この時、遺族や葬儀参列者は、故人の全身もしくは棺の蓋に開けられた小さな窓から故人の「顔」を覗き込み、故人との最後の別れを惜しむ。故人を亡くした衝撃の強さにより、遺体と対面することや故人の顔を直視することで精神的な動揺などを来す可能性もある。しかし、これまで日本において、自宅で死を迎えることがごく自然に慣習化されていた背景もあり、葬儀のなかでパニック状態に陥る状況はむしろ少なく、厳粛な雰囲気のなかで故人の死を確認し、別れを惜しむ時間を持つ場となっている。

前述のとおり、エンゼルメイクは、病状の進行や悪化に伴う衰弱あるいは治療に伴う闘病生活により変化した患者の外見を、遺族が見慣れた姿あるいは穏やかな姿に整えることを目的としており[1,2]、最期の時の「顔」の重要性を示唆している。

(3) エンゼルメイクの実際

通常のエンゼルケアの手順は次のとおりである(以下の①～⑪は引用文献 2 より抜粋)。

①家族とエンゼルケアについての相談
②洗髪、頭皮マッサージ
③顔の各部位の清掃
④顔全体の清拭・マッサージ
⑤口腔内の清掃
⑥身体の清潔（排泄物の処理等含む）
⑦更衣
⑧目と口の補整
⑨ヘアメイク
⑩クーリング
⑪遺体の移送と安置

上記のとおり、患者が亡くなる時期が近づくと、看護師は家族とエンゼルケアについて相談を行い、身体のケアやフェイスケアなど一連のケアを行い遺体の整容を完了させる。

遺族の悲しみを癒す看護ケアとして、メイクによる工夫を行うことで穏やかさを表現できるようエンゼルメイク技術の見直しに取り組み、実施した研究報告によると、エンゼルメイクに対する関心が深まり、今まで以上に患者と向き合いたいという看護師自身のモチベーションや意識が向上していた[14]。

さらに、遺体に対しては、家族だけではなく、看護師もまた特別な感情を抱いており、ケアの最中に遺体とは捉えず生前のその人に対する労いの感情や尊敬の念を抱きながらケアを行っている側面もあり[15]、看護師はエンゼルメイクを含む遺体の整容を通してその人を一人の人間として尊重する意識を示していると言える。その一方で、エンゼルメイクを実施している看護師にとっては、死化粧は果たして看護師の仕事であるのかといった疑問の声や理想の看護と現実の実践とのギャップ、最後のケアとしてきれいにして送り出してあげることで自身の看護を内省する契機としていたという報告もあり[15]、エンゼルメイクが家族のグリーフケアという視点だけではなく、自身のケアが妥当であるかどうかを内省するきっかけとなる。看護師は、入院から（死亡）退院までを連続してケアすることを重要視しており、死化粧を含む死後ケアまで行うことが看護師のアイデンティティにもなっているという[16]視点も重要であると言えよう。

おわりに

看護師による臨終あるいは逝去時のケアとして､死に顔に化粧を施すエンゼルメイクは、日本人がもつ死生観や遺体観に基づくグリーフケアの一環として捉えることができた。特にエンゼルメイクは、その人らしい顔を残すことを重んじる日本人の死生観や遺体観と関係が深く、遺体の清拭や整容、保清などのケアを通して患者の尊厳を保つとともに、最期の「顔」の重要性を示すものであった。

今後のグリーフケアのあり方として、死別によって生じる遺族の悲嘆や喪失の過程をサポートするだけでなく、遺族の新たな生活や人生の歩みを後押しするための働きかけをともに考えていくこともグリーフケアの目標の一つとして掲げていく必要がある。

【付記】本稿は、第 9 回アジア太平洋ホスピスカンファレンス(9th Asia Pacific Hospice Conference)において発表したものを加筆・修正したものである。本稿作成にあたりご協力いただいた皆様にこの場を借りてお礼申し上げる。

【引用文献】

1　小林光恵、エンゼルメイク研究会(2007)：ケアとしての死化粧―エンゼルメイクから見えてくる最期のケア、日本看護協会出版会、p.28.

2　角田直枝(2010)：癒しのエンゼルケア―族と創る幸せな看取りと死後のケア、中央法規

出版、pp.2-3.
[3] 田中愛子、岩本テルヨ(2008)：臨床現場におけるエンゼルケアの実態、山口県立大学看護栄養学部紀要創刊号、pp.39-42.
[4] 杉本眞佐子、陶山香、清水晶子、佐々木祐子(2011)：グリーフケアを考えた家族参加型の死後のケア、第 42 回日本看護学会抄録集 成人看護Ⅰ・Ⅱ（合同）、p.72.
[5] 坂口幸弘(2011)：医療従事者に求められるケア、EB Nursing、11(4):613-618.
[6] 飯田正代、上口奈与美(2007)：家族参加による「死後の処置」に対する家族心理調査―シャワー浴を取り入れて、日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ、37:377-379.
[7] 荻原桂、三木明子、谷美行、工藤静子(2007)：エンゼルケアに参加した遺族の思い、日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ、37:380-382.
[8] 古内耕太郎、坂口幸弘(2011)：グリーフケア―見送る人の悲しみを癒す―「ひだまりの会」の軌跡、毎日新聞社、p.21.
[9] 瀬藤乃理子、丸山総一郎(2004)：子供との死別と遺された家族のグリーフケア、心身医学、44(6):395-279.
[10] 柏木哲夫、藤腹明子編(1995)：系統看護学講座別巻 10. ターミナルケア第 2 版、医学書院、p.23-23.
[11] 坂田三允編(1998)：日本人の生活と看護「シリーズ」生活をささえる看護、中央法規出版、pp.40-43.
[12] 嶋根克己、玉川貴子(2011)：戦後日本における葬儀と葬祭業の展開、専修人間科学論集 1(2)（社会学篇第 1 号）、pp.93-105.
[13] 村澤博人(2004)：【ケアとしてのエンゼルメイク（死化粧）】顔の役割と化粧の力―①顔は記憶の中に存在し、社会的に共有される、ナーシング・トゥデイ、19(2):20.
[14] 水島美由紀、菅原美奈子、徳間幸子、今成歩美(2010)：エンゼルメイクの技術の見直しと実施から得られた看護師の意識変化、厚生連医誌、19(1):39-43.
[15] 小林祐子(2004)：死後のケアに関する意識調査―＜処置＞＜ケア＞を超えて―、ホスピスと在宅ケア、12(3):197-204.
[16] 川添裕子(2007)：病院における死：死化粧への二つの方向性から、千葉看護学会誌、13(1):35-43.